

序 竹内順一 岡佳子 ルイズ・コート アンドリュー・M・ワツキー

I 中國からきた茶壺

唐物が茶道具になったとき 竹内順一 2

唐物茶壺の展開 李寶平 栗建安(訳・中井淳史) 13

唐物茶壺 西田宏子 34

日本における唐物茶壺の考古学 井上喜久男 45

茶壺の役割——緑茶の味との関係 大森正司 69

II 「千種」のすがた

「千種」について ルイズ・コート(訳・松村真希子)

一六世紀の茶会記に記された「千種」の拝見記 竹内順一 97

「千種」をめぐる名 アンドリュー・M・ワツキー(訳・常田道子) 80

「千種」の口覆いについて 吉岡明美 130 110

III 「千種」、ふたたび海を渡るまで

「千種」の口覆いと名物裂・富田金襴について……………佐藤留実
染料——「千種」に附属する染織品から……………毛利千香 ブライス・マッカーシー

- 「千種」の伝来と唐物茶壺——江戸時代初期を中心に……………岡佳子
野々村仁清作「色絵叭々鳥図茶壺」をめぐって……………岡佳子
一七世紀以降の「千種」の伝来……………熊倉功夫
皓々齋宗也筆「茶壺紐飾雛形書」について……………岡佳子
「千種」と国際美術市場……………ジュリア・ミーチ(訳・前崎信也 清水彩野) 212 206 185 179 158

「千種」関係史料集

茶会記・名物記等

231

「千種」附属文書

238

久田家文書

245

「千種」と主要附属品一覧／編者・著者紹介／謝辞

The Art of Tea” 日本語版出版の依頼を正式に受け入れてくれたのである。そこから本書の編纂が始まった。

本書の構成と内容

『千種』物語——二つの海を渡った唐物茶壺は、一六頁のカラーオン絵から始まる。「千種」の正面像、他の三方向からみた姿と井上喜久男氏による実測図である。次が富田金襴の口覆いに、それを結ぶ口緒、柴田綾子の敷衣、これらの染織品は室町期までさかのぼるため拡大図も付けた。ついで網と飾り紐へと続くが、これらを纏つた「千種」の姿、あるいは実際に飾り紐を結ぶ画像なども掲載した。加えて、「千種」と附属品を入れるための箱三個と箱書、底の墨書と附屬文書類も載せた。すなわち、唐物茶壺「千種」自体と、今にいたるまで附属してきた口覆い、紐、箱、文書類のうち、各論で取りあげられた重要な作品、それらが「千種」を飾った状態までを復元したのである。

本文は、一六の論考を内容に合わせ三部に分かつた。

第一部は「中国からきた茶壺」である。「千種」は中国で作られ、日本に運ばれて唐物の名物茶壺となつたが、ここでは、その状況を生んだ背景を考察した論文を集めた。

最初は竹内順一の「唐物が茶道具になつたとき」である。「唐物」は中国からの輸入品の総称だが、茶の湯が最も隆盛した一六世紀後半に骨董の唐絵や墨蹟、「形」「比」「様子」の三条件を満たした茶入や茶壺が名物の茶道具となつた。その証しとして茶人たちが与えたものが名物裂と呼ば

れる唐物染織品の表具・口覆い・袋であった。

続く、李寶平・栗建安氏による「唐物茶壺の展開」は、日本で茶壺の用途をもつ中国の施釉四耳壺の窯址、都市遺跡、沈船等からの出土遺物をもとに、「千種」が何れの窯で焼かれたのかを考察した。唐物茶壺の源流をたどる意欲的な論考である。

西田宏子氏の「唐物茶壺」は、中国で香料や薬の保存用壺が一四世紀前半に渡来し、日本で茶壺となり、贈答品や引出物として実用品以上の価値を認められたことを明確にした。だが、名物となつた茶壺も、一六世紀末の呂宋壺の大量輸入が原因で価値が低下した。その経過を記録と伝世品をもとに綿密に追つてゐる。

井上喜久男氏の「日本における唐物茶壺の考古学」は、北は北海道上之国勝山館跡から西の堺環濠都市遺跡にいたるまで、唐物茶壺が出土した中世の城館・都市屋敷などの遺跡を取りあげ、遺跡の性格、出土茶壺の特徴などを詳細に記載し、茶人の美意識から選ばれた鑑賞陶器から、実用品の廃棄された壺まで遺跡の性格によつて異なつていていたことを明確にした。それは、竹内の、厳しい条件を満たした茶壺が実用品から名物となるという視点にも通ずるだらう。

西田氏は前掲論考で、名物の唐物茶壺は保管する茶の味を甘くする、と中世の人々が記していると指摘したが、大森正司氏は「茶壺の役割——緑茶の味との関係」において、葉茶を保管した後の「秋出し新茶」の成分を詳細に化学分析し、シユウ酸などの減少から刺激や渋味が減つて旨味が増すことを明らかにした。「千種」大壺への保管が茶味を高めた原因がここにある。

第二部は「「千種」のすがた」と題し、「千種」そのものと口覆いなどの附屬品に関する論考を集めた。冒頭がルイズ・コートによる「「千種」について」である。コートは土、釉、造形から中



図2 灰被天目
中国・福建省建窯 南宋時代(13世紀)
徳川美術館蔵(法量は7頁図3)



図1 姥口庵釜
室町時代(15世紀後期) 高17cm 胴径29.1cm
徳川美術館蔵

の大壺の記述があるが、その全てに名がつき、特別な由来が認められる。「千種」もそのひとつで、他と同様に、その記述は「名」から始まる。それは、名が道具を識別するための最も重要な要素だからである。「千種」の当時の所有者が商人で茶人でもあつた菅田屋徳林(生没年不詳、一五六〇～九〇年頃活躍)であったことが、簡潔ながらに示唆に富んだ記述からわかる。彼が居住した堺は、京の都の南に位置する商港都市で、茶の湯の中心地でもあつた。続けて、堺の茶人の引拙(一四五八～一五二七)が、徳林以前に千種を所有したことがあると記す。

引拙の名は『山上宗二記』の他の箇所に幾度も記載されており、茶道具の目利きとして著名な人物であったとわかる。茶の湯の祖といわれる珠光(一四二三～一五〇二)の有能な弟子で、多くの茶人から慕われ、現存する姥口庵釜(うばぐちあられ)や灰被天目(はいかつぎ)などの重要な茶道具を所持していた。『山上宗二記』に記された徳林と引拙の名は、茶道具の本質の理解に熟達した者たちがこの壺を所有し、高く評価していたという事実を読者に伝えるのである。この点についてはまた後述する。

二 「千種」に記載された人の名と花押

「千種」には、まさに眼に見えるかたちで人の名が記載されている。壺

各花押の様式と位置から、以下の順で書かれると推測される。

- (a) 中心部の縦長の墨書(e)の上部の上下逆に据えられた花押。
- (b) 徳隣による署名(f)の左側に据えられた花押。
- (c) 左下の花押(「祥」という文字[d]の下)。
- (e) 上下逆の花押(a)の真下の花押。
- (f) 徳隣の署名と下に据えられた花押。

この順序から判断すると、16世紀の二つの茶会記に4つの文字・花押に関する情報が記された時点では、当時「千種」を所有した誉田屋徳林は、自分の花押を据えていなかったと考えられる。

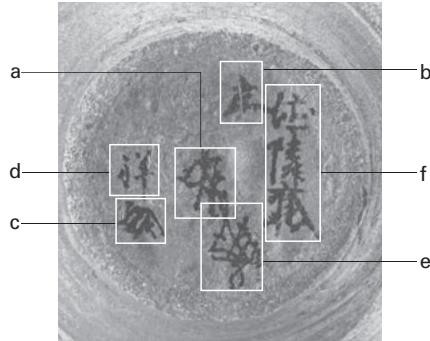


図3 「千種」底面の五つの花押と文字

の底に、墨で書き込まれているのである。明確に判読できる文字もあれば、花押もあり、読み取り易さには幅がある(図3・4)。一六世紀の二つの茶会記(史料⑦⑨)には、「千種」の底が膨れ、「祥」という文字と四個の花押があると記載されているが、個々の花押について識別されない。さらに、「千種」の附属文書に含まれる明治二一年(一八八八)の久田半床庵譲状(口絵⑧/史料⑯)には、千種の五個の花押のうち四個は、相阿弥(一四七二~一五三五 同朋衆として足利将軍に仕えた)と、所有者であった引拙、重宗甫(一五六四~八四年頃活躍)、誉田屋徳林のものと記されている^③。しかし、どの花押が誰のものであるかは明記されていない。

一六世紀や一九世紀後半の緊密な茶人たちの世界においては、「千種」に据えられた花押はたやすく読めたかもしれない。しかし現在では五つの花押の形は鮮明にわかるが、判読できるのは右端のみである。それは、花押の上に「徳林」との署名があるからで、徳林が壺の所有者であった事実を表すとともに、壺に対する賞賛の証ともいえるだろう。

今、残り四つの花押が判読できないことは、この壺の重要な重要性を減少させるものではない。花押の墨の色には若干の違いがあり、赤外線写真でみるとその差異は明白である(図4)。墨色の違いは、花押が異なる時期に据えられたという説と一致する。一六世紀末までに五人の人物がこの壺を入手し、筆と墨によって自らの名を記した。この事実は、壺が緊密



図4 千種底面の赤外反射画像
写真:Molly McGrath, Carolyn Joseph

で個人的な繋がりをもつのに値することの証であり、それを持ち主が花押を見る者に伝えようとしたことを示しているのである⁽⁴⁾。この文字を記した人々は、名は情報を簡明に伝えるということを理解していたのであろう。だからこそ、茶人たちは茶道具に固有の名を与えたのである。

三 「千種」の命名

日本における「もの」に名を与えるという慣習は、茶人が始めたわけでも、茶の世界ですぐに普及したわけでもなかった。古代から、日本では世に聞こえた楽器、優れた刀、馬など、最も大切な物に名を与える慣習があつた⁽⁵⁾。しかし、一七世紀までは、大半の茶道具には名がなかつた。それは「千種」と同じような茶壺でさえもある。一六世紀の茶会記やその他の記録には、「壺」、「大壺」、「茶壺」などという表記が頻出し⁽⁶⁾ときには無名の壺が所有者の名で区別されることもあった⁽⁷⁾。『山上宗二記』では水指など、名のない道具が多く記載され、名が付いているのは二二の大壺と、茶入、釜、その他数点のみであった⁽⁸⁾。この点からも『山上宗二記』の時代に、道具に名を与えるのは特別なことであったとわかる⁽⁹⁾。

吉岡明美(よしおか・あけみ)

1953年生。元根津美術館学芸員。染織美術。「唐絵と金欄」(『茶道学大系』別巻, 淡交社, 2000), 「紹鷗緞子について」『武野紹鷗 わびの創造』共著, 思文閣出版, 2009), 『金欄・緞子』(根津美術館, 共著, 2009).

佐藤留実(さとう・るみ)

1961年生。五島美術館主任学芸員。染織美術。『名物裂一渡来織物への憧れ』(五島美術館展覧会図録, 2001), 『古渡り更紗』(同, 2008), 『更紗一命の華布』(共著, 淡交社, 2016).

毛利千香(もうり・ちか)

1973年生。国立スマソニアン協会, フリーア美術館・アーサー・M・サックラー・ギャラリー研究員。保存科学, 生薬学。「屠蘇酒の起源に関する考察」(共著, 『薬史学雑誌』50.1, 2015), "Jincao (Arthraxon Hispidus) A Plant Used in Traditional Chinese Medicine and for Dyeing" (In *Color in Ancient and Medieval East Asia*, Lawrence, KS: Spencer Museum of Art, 2015).

ブライス・マッカーシー Blythe McCarthy

1965年生。国立スマソニアン協会, フリーア美術館・アーサー・M・サッ克拉ー・ギャラリー, アンドリュー・W・メロン財団主任研究員。保存科学。Scientific Research on Ancient Asian Metallurgy: Proceedings of the Fifth Forbes Symposium at the Freer Gallery of Art (London: Archetype Publications, 2012).

熊倉功夫(くまぐらい・さお)

1943年生。MIHO MUSEUM館長。日本文化史, 茶道史, 『後水尾天皇』中公文庫(中央公論新社, 2010), 『熊倉功夫著作集』全7巻(思文閣出版, 2016~刊行中).

ジュリア・ミーチ Julia Meech

1941年生。*Impressions*(発行:アメリカ日本美術協会)編集者, ジョン・C・ウェーバーコレクション学芸員。The World of the Meiji Print: Impressions of a New Civilization (New York: Weatherhill, 1986), "Kuniyoshi and the Hell Courtesan" (国芳と地獄太夫) in Miho Museum, ed. A New Yorker's View of the World: The John C. Weber Collection (Shigaraki: Miho Museum, 2015).

翻訳者

中井淳史(なかい・あつし)

1971年生。兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科教授。歴史考古学。『日本中世土師器の研究』(中央公論美術出版, 2011), 『播磨六箇寺の研究I・II』(共著, 大手前大学史学研究所, 2013・2015).

松村真希子(まつむら・まきこ)

1952年生。陶磁史。「明治期のサツマの様相」(『東洋陶磁』Vol40, 東洋陶磁学会, 2011), 「壳立目録にみる井戸茶碗一名称から知る様相」(根津美術館紀要『此君』第6号, 2014).

常田道子(つねだ・みちこ)

1973年生。コロンビア大学東アジア言語文化学部非常勤研究員, 早稲田大学客員研究員.

前崎信也(まえざき・しんや)

1976年生。京都女子大学家政学部准教授。近代文化史, 陶磁史, 『松林竈之助九州地方陶業見学記』(宮帯出版社, 2013), 『大正時代の工芸教育——京都市立陶磁器試験場附属伝習所の記録』(宮帯出版社, 2014).

清水彩野(しみず・あやの)

1994年生。京都女子大学生活造形学科在籍.

編者・著者紹介

編者

竹内順一(たけうち・じゅんいち)

1941年生。東京藝術大学名誉教授。永青文庫理事。茶道美術史、陶磁史、美術館学。『山上宗二記一天正十四年の眼』(五島美術館展図録116号, 1995), 「紹鷗時代の茶碗」(『武野紹鷗 わびの創造』共著, 思文閣出版, 2009), 『講座 日本茶の湯全史』第1巻中世(共編著, 思文閣出版, 2013)。

岡佳子(おか・よしこ)

1954年生。大手前大学総合文化学部教授。日本文化史、陶磁史。『寛永文化のネットワーク—「隔菴記」の世界』(共編著, 思文閣出版, 1998), 『国宝仁清の謎』(角川書店, 2001), 『近世京焼の研究』(思文閣出版, 2011)。

ルイズ・コート Louise Cort

1944年生。国立スマニアン協会、フリーア美術館・アーサー・M・サックラーギャラリー学芸員。陶磁器。*Shigaraki Potters' Valley*(Tokyo and New York: Kodansha International, 1979; reprinted New York: Weatherhill, 2000), *Temple Potters of Puri*(co-author with Purna Chandra Mishra. Ahmedabad, India: Mapin, 2013)。

アンドリュー・M・ワツキー Andrew M. Watsky

1957年生。プリンストン大学教授。日本美術。*Chikubushima: Deploying the Sacred Arts in Momoyama Japan*(University of Washington Press, 2004), Association for Asian Studies, John Whitney Hall Book Prize (2006), Smithsonian Institution, Freer | Sackler Galleries, Shimada Prize (2006)。

執筆者

李寶平 Li Baoping

1974年生。サザビーズシア国際研究員、北京大学『陶瓷考古通訊』編集主幹、英国東方陶磁学会理事。中国考古学、陶磁器。『中国出土瓷器全集』全16卷(編集主幹, 北京, 2008), Regina Krahl and Jessica Harrison-Hall,『大英博物館大維德爵士藏中国陶瓷精選』(校訂, 北京, 2013), Jessica Harrison-Hall,『大英博物館藏中国明代陶瓷』(校訂, 北京, 2014)。

栗建安 Li Jianan

1951年生。元福建博物院考古所所長。中国陶磁、海洋考古学。『漳州窑』(共著, 福建人民出版社, 1997), 『西沙水下考古』(共著, 科学出版社, 2006), 『磁灶窑址:福建晋江磁灶窑址考古调查发掘报告』,(共著, 科学出版社, 2011)。

西田宏子(にしだ・ひろこ)

1939年生。根津美術館顧問。東洋陶磁史。『日本陶磁大系22 九谷』(平凡社, 1990), 『中国の陶磁6天目』(共著, 平凡社, 1999), 『東西交流の陶芸史』(中央公論美術出版, 2008)。

井上喜久男(いのうえ・きくお)

1949年生。元愛知県陶磁資料館長補佐。考古学,『古瀬戸と古備前』(新編名宝日本の美術 第12巻, 小学館, 1991), 『尾張陶磁』(ニュー・サイエンス社, 1992), 『窯変と焼締陶』(共編著, 講談社, 1999)。

大森正司(おおもり・まさし)

1942年生。大妻女子大学「お茶大学」校長。食品科学、食品微生物学。『新・緑茶の驚くべき効用』(チクマ秀出版社, 1999), 『おいしい「お茶」の教科書』(PHP研究所, 2010)。